



海外留学の展望 浅井宏純氏へのインタビュー

Timothy Newfields



浅井 宏純 (あさい ひろずみ) 氏

プロフィール： 1974年に渡米、パイロットを目指しウエスト・ロサンゼルス・カレッジに入学。1978年同校卒業。

帰国後、(株)海外教育コンサルタント(EDICM)に入社。主に北米、欧州、ニュージーランド、オーストラリアの留学事業に33年間携わる。同社代表取締役社長に就任。

2008年、EDICMを退職後、13カ国の仲間と大型トラックで10ヶ月間でアフリカ大陸を一周する。

2010年EDICM顧問を退職。クラス・アフロート(世界を旅するカナダ洋上高校)前日本代表。NPO法人「未来の学校」理事。

著書に『アフリカ大陸一周ツアー』(幻冬舎新書)、『知っておきたい!海外留学の理想と現実』(岩波新書)、『小・中学生の海外留学事情』(講談社プラスアルファ新書)などがある。

海外留学コンサルタントとして30年以上、お仕事を続けてこられ、海外留学をする日本人の変化に気付かれた点がありますか？

日本で海外留学が広まっていったのは1975年頃からです。それから約35年。留学業界の仲間が話題となるのが、留学の中身が大きく変わって来たということです。

変化を挙げるとしたら次の3点です。

(1) 留学先の多様化

90年以降、留学先の多様化がはじまりました。定番であったアメリカやイギリスだけでなく、国策として留学生招致に力を入れてきたカナダ、オーストラリア、ニュージーランドなどに留学する日本人が増えました。

さらに21世紀に入ると、中国、マルタ、フィリピン、フィジーなどの国にも日本人は留学しています。

(2) プログラムの多様化

昔は、留学というと、一定期間海外で教育を受けること、研究に携わること、と考えられていました。最近の留学は、期間にかかわらずプログラムに「学び」があれば留学と呼ぶようになりました。

90年代までは、語学留学、学部留学、大学院留学と明確にタイプが分かれていました。しかし現在は、語学を勉強してから条件付きの入学が認められるプログラムや、語学留学だけでなく、プラスアルファが学べるプログラム、例えばスポーツ、ダンス、芸術、ネイル、フラなどを学ぶプログラムなどもあります。親子留学もあれば、語学研修のないサーフィンや乗馬留学もあり、また、インターンシップを絡めた留学も人気です。

(3) 留学イコール学位取得では無い

語学留学が多様化、「旅行化」している。参加者のハードルが精神面でも費用などの物理面でもだいぶ下り、気軽なものになっています。海外の大学に留学する場合も留学先の学位取得ではなく、日本の大学との交換留学、認定留学として1年間のみ留学するパターンが増加しています。今後も1年間のみ留学パターンは、増加するでしょう。

短期留学プログラムを単なる観光旅行だと批判する意見もありますが、どう思われますか。



単なる観光旅行でもいいから、若者はどんどん世界を見に行ってほしい。留学は「厳しいもの」「学位をとるもの」といった先入観は捨てた方がいい。留学の目的が多様化する中、そのような固定観念は、時代遅れになっています。

留学後のフォローアップレッスンをしない学校があります。そのためか、留学中に習得した語学力を維持できない学生を多く見かけます。そのことについてどう思われますか？

大学でフォローアップレッスンがないとすれば、大学側のカリキュラムの組み方に問題があると思います。民間のプログラムには、フォローアップレッスンを提供する機関はたくさんあります。当然費用もかかります。

そもそも、留学生は帰国後どのようなフォローアップレッスンを受けたいのか、しっかりしたビジョンを持つべきです。留学中にやる気をもって臨んだ学生は、帰国後、習得した語学力を維持する勉強法を自分自身で見つけます。また、留学後、やる気のない学生をフォローアッププログラムに無理矢理参加させること自体に、疑問の余地があります。

留学に対する日本人の誤った捉え方、認識についてどうお考えですか？

誤った捉え方というより、日本の「留学」の定義は、とても曖昧なニュアンスで捉えられています。誤った捉え方と言えば、先進国の方がその他の国より、優れているという考えです。こういった考えは捨てる必要があります。それぞれの国が持つ文化の価値は、単純な判断基準では分かりません。誤った捉え方を下記にあげてみます。

(1) 留学とホームステイを同一に考えている人が多いこと。

職業を聞かれ、私が「留学の仕事です」と答えると、「ホームステイですね」と今でも言われます。

(2) 成績が悪ければ退学させられる。

日本では、成績が悪くても退学させられることは滅多にありませんが、海外の留学（語学留学以外）ではよくあることです。留学生が退学させられ、転校許可を得られない場合には、自動的に学生ビザも失います。日本に帰国せざるを得ません。海外で学ぶ日本人学生に、学業平均値が一定基準を下回ったらどうなるか、事前に伝えても理解されていないケースが多いのです。

(3) 海外の教育レベルが日本より低いと思っている。

特に中学、高校の数学のレベルが日本より低いのではないかと心配するケースがよくありました。今ではこのような懸念は減っています。日本の学力レベルが下がったのでしょうか・・・？

2005年の御著書についてお尋ねします。「留学をすると国際性が育つのか。外国人との違いが理解できるのか。（中略）他の文化に先入観を持たないようにするには、かなり努力が必要であり、国際性を身につけるには、先入観を持たないことが重要です。」

(P. 24) と、ありますが、浅井さんのおっしゃる国際性とはどのようなものでしょうか。

私の言う国際性とは、敬意と好奇心をもって海外（異文化）に目をむけると同時に、自国の文化を理解することです。人は自分の親と生まれる場所を選ぶことはできません。自分の家族のこと、住んでいる町のこと、日本のことをより深く知ること、自己をはっきりと表現することができるようになります。他国の人たちの様々な価値観も尊重することができるようになるのです。

ごく普通の家庭に育ち、親が海外経験がなくても国際性は育ちます。外国語や海外の文化に興味を持つことで、インターネットを通じて外国人とコミュニケーションを図ったり、海外からJETsプログラムで来られた英語の先生と進んで交流を持つことでも国際性は育つと思います。大人でも、留学しなくても、本来国際性は身につくと考えます。



同書の中で、「国内で開催される国際交流は、日本人向けの企画だと思えます。(中略)日本にいる外国人のためではなく、日本人が海外で困らないようにするための催しでは、決して日本人の国際性は育たないと感じています。」(P.25)とあります。日本で真の国際性を育てるための催しをするならば、どのような内容が良いとお考えですか。

日本の大学は国際交流の仕方に迷いがあると思えます。私の知る国際交流の催しのほとんどが、日本人学生に「日本がいかに恵まれている国」かを思い起こさせるもので。国際性を身につける方法として、私は次の3つの提案をしたいと思えます。

- (1) 大学にサマースクールプログラムを作る。例えば、留学生(外国人)と日本人学生が二人一組になって活動するバス旅行もいいでしょう。理想は1週間から1ヶ月ほどですが、一泊二日でも、行き先はどこでも構いません。キャンプ、東京見物、震災被災地訪問、他の大学との交換訪問などが考えられます。費用は留学生が自分で払える範囲内で、できるだけ安く抑えることです。食べ物は、水とオニギリや缶詰で十分です。大学の駐車場、公園、河原など電気・水道・ガスがない所でテントを張って泊まる経験はとても良いと考えます。日本は便利さで溢れています。この地球上には、電化製品を持ってない人々がいるのですから。旅行中、旅行で得た体験を発表しあうことで、お互いの違いを実感することができます。一つ屋根の下で生活を共にすると、不思議と互いに理解し合えるものです。
- (2) 大学の学費のためにアルバイトをする留学生と日本人学生が共に働く。短期間でも、職種を選ばず必死で働く彼らと一緒に働くことができれば、得るものは多いでしょう。
- (3) 日本の学生が日本語を(安くまたは無料で)世界の人に教える。教えることで異文化を学び友

好関係を築くことができます。フェイスブックなどですでに海外の仲間と交流する学生もいます。このような活動は日本語を学ぶ興味を刺激するだけでなく、海外にいる日本人学生のイメージをも高めることにもなると思えます。

「日本にいると普通のこと、外国に行くと初めてそうでないと気づくことがあります。(中略)留学生が国際的であるかどうかは、日本を出る前に受けた日本でのしつけや教育によるところが大きい。」(P.25)とありますが、留学前に学生に必要な教育、またはしつけとはどのようなもののでしょうか？また、留学プログラムを作る上で何を重要視すればよいとお考えですか。

アフリカでは日本では当然あるべき電気・水道・ガスのない不便な生活を送っている人がほとんどでした。現地の人とは、笑顔ですすめ合う挨拶ですぐに仲良くなれました。ここで言うしつけや教育とは、最近、私たち日本人が失いつつある、見知らぬ人にも礼儀正しく挨拶できるよう基本的なエチケットを身につけることです。また、誰に対しても約束を守ると言う誠実さも必要です。このようなことが、自然に当たり前になればうれしく思います。留学する人には、次に述べることを渡航前に身につけてもらいたいと考えます。

- (1) 挨拶ができる。年配者を敬える。

スムーズにコミュニケーションを図るために、「ありがとうございます。いただきます。ごちそうさま。おはようございます。」は挨拶の日本語でも通じます。日々の生活の中で礼儀正しさを示していくことは、大切なことです。

かつて、世界中から選ばれた20名ほどの中高生が船上で学ぶ「世界を旅する学校・クラスアフロート」を広島県の協力を得て一週間ほど、日本に招待したことがあります。彼ら中高生は皆に覚えたばかりの日本語で礼儀正しく挨拶をしていました。広島路面電車に乗ると、年配の人にすぐ席をゆずっていました。それを見た広島県の先生が「近頃の日本の若者にはなかなかできないことね。」と感心していました。クラスアフロートの学生は、多くの国を訪問するので、どのようにすれば受け入れてもらえるのかを知っているのです。



(2) 約束を守る。時間に正確。我慢(辛抱)できる。

朝きちんと起き、身綺麗にすることは留学に際し重要です。特にホームステイ先で歓迎されます。あなたが、留学生を自宅に受け入れることを想像してみてください。どんな人がいいですか？ 最近、イギリスの学校の校長先生から「最近の日本の生徒は、じっとしていることができなくて、どこでもしゃがんだり、ズボンをズラして履いている。だらしが無い」と聞かされ、ショックと同時にとても失望させられました。

(3) 人を疑う能力(判断力)を養うこと(これは、日本人に欠けていることです。)

担当した学生(中高生)が学校内で所持品をよく盗まれ、お金を他の学生に貸しても返ってこなかったことがありました。彼はスイスの名門校に通っていたのですが、先生から「たとえルームメイトであっても気をつけてください。」と注意を受けました。日本人は騙しやすいと知られています。相手が「信用できるか?」、言っていることが「本当か?」とちょっと疑ってみることで。

もう一つは、イタリアのインターナショナルスクールに入学する女子中学生を学校に連れていった時のことです。「女の子(留学生)は、男の子に甘い言葉で誘われ、結局利用され、傷ついてしまうことがあるから注意するのですよ」と初日に先生から注意を受けました。

自分を不幸な状況に陥らせないためにも、しっかりした判断が、中学生ですら女子学生には特に必要です。自分が出会った状況をしっかり判断でき、サバイバル術を身につけてほしいのです。また、失礼にならない程度に、はっきりと「NO」が言えることも必要です。

「インターネットや携帯電話の普及により、コミュニケーションのありかたがすっかり変わってしまいました。パソコンやメールに依存しないと、自分の考えが伝えられない学生が出てきたのです。」(P. 48)と、留学先での些細なことを携帯ですぐ日本の親に伝え、親がエージェントに文句を言って介入する事例が紹介されていました。留学しても日本人の友達にメールしたり、日本の親に通話ばかりしては、留学する意味がありません。携帯電話についての対処方法をどうお考えになりますか？

携帯電話やインターネットの急速な普及で、私も対処方法は分からなくなりました。学生が携帯電話を使いすぎないための方策をとっている学校もあります。例えば、全寮制のアメリカの学校では携帯の使用を全面禁止していました。学生たちには何らかの規制が必要だと思いますが、スイスには、全員に携帯電話を持たせる学校もあります。

手紙は、書きながら自分の考えを整理できるという利点があります。また、返事を受け取るまでに時間がかかるので、その間に問題が解決していることも少なくありません。しかし、電話は感情的になり、すぐその場で結論をだしてしまう危険性があります。そのことを十分に心得て、親は子供を甘やかさず、子供たちの要求にすぐに応じないことです。EDICMのスタッフとは、ここに話が落ち着きました。

留学のリスク管理についてですが、親は現地の治安や麻薬、暴力について心配しがちです。しかし、それとは違うリスクとして、留学生がやる気を失いニートになる(P. 55)可能性があると書かれていますね。これについて教えてください。

留学生が学校に通わなければ当然、学生ビザを失効します。1980年代から日本では子供たちの登校拒否の問題が深刻になりました。この頃は、不登校といわれた生徒をたくさんお世話しました。今でも私自身は、不登校であっても本人が望めば留学することは良いことだと信じています。自ら留学したいなら応援したい。海外で高校や大学を卒業した学生も多くいるし、親が喜ぶような成功例はたくさんあります。

不登校になった自分の子供に「家でぶらぶらしていないで学校に行ってほしい」と、ほとんどの親は願っていますが、「学校に行きたくなければ、行かなくてもいいのよ」と言う親もいます。後者の場合、子供は留学先で不登校をしても平気です。親が「いいよ」というのですから・・・。



それでも、親は子が日本にいるより海外にいることを望みました。こういう場合、お金の要求以外に連絡がとれなくなり、挙げ句に親から依頼を受け、私が留学先に学生を迎えに行ったことが幾度かありました。たいていこのような学生は何もせず、日本人の仲間と一日をすごしていました。ビザが切れていたのが不法滞在となり、帰国しなければなりません。他の留学コンサルタントとこの問題について話しましたが、彼らも海外にかなりの数の留学ニートがいると認識していました。

私は本当にやることなく、退屈すれば、人は本を読んだりスポーツをすると思っていました。しかし、インターネットとゲームがあれば、ひきこもる人が多いことを知ったのもこの時です。お金が続く限りひきこもり生活をしている人は数多くいます。子供がこのような留学生活をしていても、現状を知らないためか、それほど心配してないように見受けられる親もいます。

浅井さんは「留学とはお金を出して、苦勞を買いにいくもの (p. 87)」と書かれています。苦勞について学生に留学前にアドバイスするとしたらどのようなことをされますか？

かつて、アメリカ留学の草分けである初期のフルブライト留学生の方々に話を伺ったことがあります。\$1=¥360 固定相場の頃です。皆さんは、働きながら勉強され、相当苦勞されたようですが、「今となっては、よい思い出」とおっしゃっていました。

これから留学する大学生に「留学すると どのようなことで苦勞すると思う？」と聞くのですが、「苦勞はいやだ」と言う学生が増えているのです。日本人には「苦勞に価値を見出す」と言う考えは、なくなりつつあるのでしょうか。

日本は生活水準がとても高い国なので、どの国に留学しても生活面に不便に感じる人がたくさんあります。しかし、不便かどうかは、それぞれの育った環境によるようです。最初は満足しないかもしれませんが、まもなく不便に慣れます。私自身は、アフリカで方々旅行したので、今では飲める水があるだけラッキーだと思うようになりました。人は何にでも慣れることができると思います。住めば都、苦勞も慣れれば楽しくなります。

「受け入れる海外の学校は、自立した責任ある大人が来ていると判断しています。しかし、じつのところ、現在の日本では 18 歳でも自立した大人になっていない人が多く留学しているのです。」 (p. 126) とあります。そうした未成熟な大学生の留学をサポートするには何が重要で、また渡航前にどのようなことを、教えておく必要があるとお考えですか。

私は、物理的に親から離れることが自立の一步と考えるので、海外留学は未成年が自立のため(修行)にもってこいだ信じ、長年の間、たくさんの中高生の留学を支援してきました。しかし、この本を書いてから、「高校を卒業しても 未成熟で自立ができてないのが当たり前」という考えに変わりました。特に語学の勉強もせずに漠然と語学留学する方には思い切って「家出するくらいの気持ちで飛び出せ」かな？

海外留学をしても語学力が身に付かなかったという話を聞きます。語学習得のための一番良い方法とは何だと思われますか？

留学で語学力が身につくかどうかは、しっかりした動機があるかどうかです。バブル期の金余り時代には多くの学生が留学し、ただ遊び回っただけで終わった学生もいました。それはそれでよかったです。しかし、ここ数年、当たり前のよう就職で英検やTOEICの点数が要求され、必死で学ぶ学生が増えてきました。留学機関や英語学校経営者の仲間に聞くと、「やる気のある人は、留学しなくても英語力を身につけている」そうです。近年は親の経済事情が厳しいので、学生のハングリー精神が蘇ってきていると聞き、嬉しく思っています。



御著書の中で、留学を成功させる学生の条件は、語学の点数以外に、① 社会的常識や礼儀をわきまえていること。② プラス思考であること。発見を楽しもうとしていること。③ 日本の論理を持ち込まず、相手の文化をまず尊重することだとおっしゃっていますが、このお考えは今も変わりませんか？

基本的に変化ありません。ただ、書いておきながら”今の社会的常識”が何なのか私自身が説明できなくなっているのです。最近はこのような質問を受けると、次のように答えています。

①+③=敬意をもって人々や外国に接すること。②=好奇心が旺盛であること。

留学は自分自身や家族のためだけでなく、「日本のためにある。日本は世界のためにある。」と私は思います。高い志を持って挑戦する人は、それだけで「成功」です。そして、たとえ挫折や失敗があったとしても、留学先から元気に日本に帰ってくれば「大成功」である、と信じています。

参考文献

- 浅井宏純 2002 『小・中学生の海外留学事情—親と子の自立をめざして』 講談社プラスアルファ新書
浅井宏純 2005 『知っておきたい!海外留学の理想と現実』 岩波書店
浅井宏純 2010 “ぼくの見た AFRICA “ <http://boku-africa.sblo.jp/>
浅井宏純 2011 『アフリカ一周大陸ツアー』 冬幻舎新書
浅井宏純, 森本 和子 2005 『ニートといわれる人々 自分の子供をニートにさせない方法』 宝島社
『未来の学校新聞』(2007年11月 未来の学校新聞 第2号)
http://futureschool.heteml.jp/themes/FS_our_files/newsletter_J2.pdf

(本稿は、2011年10月21日に行なわれたインタビューとメールによるやりとりで構成した。)

ウェブサイトのお知らせ

ウェブサイトから以下の情報が自由に入手できます

研究部会の会則

<http://jalt-sa.org/con.htm>

今後のイベントのお知らせ

<http://jalt-sa.org/events.htm>

留学に関するリンク

<http://jalt-sa.org/links.htm>